

成する東西方向の掘立柱塀も、同様に東へつづいていきます。ただし、この石組大溝はある時期に埋められて、底に石を敷き詰めた幅0.9m、深さ0.3mほどの浅い石組溝に造り替えられていることが、あらたに判明しました。

北限に近い関係からか、建物の密度はさほど高くありません。調査区東南部で、大型の掘立柱建物1棟を確認している程度です。一方、遺物は大量に出土しており、とくに藤原宮期の溝からは膨大な量の土器が見つかりました。

発掘調査はまもなく佳境にはいり、9月後半から順次、遺構写真の撮影や平面実測などをおこなっていく予定です。 (飛鳥藤原宮跡発掘調査部)

文化遺産研究部の調査研究概要

年度計画にもとづく調査研究も、4・5月の準備期間を経て、6月以降いよいよ本格的に稼動し始めました。とくに7月に入ってからは、町並み調査や文書調査、遺跡整備の調査など、現地に出かけての調査が多くなっています。

建造物研究室では、醍醐寺、唐招提寺、東大寺、元興寺など古代建築の調査をはじめ、高山市の町並み調査や文化財建造物の保存修復に関する研究など、活動の場面は多岐にわたります。またこれに併せて、文化庁が行う平城宮跡第一次大極殿院復元の事業に、専門的・技術的な立場から援助するという大きな仕事があります。ただし、本年度からは独立行政法人化に伴って、事業主体である文化庁などの要請に応じて助言し援助するという立場に変わっていますので、昨年までとはいささか異なる戸惑いもあります。



北海道常呂遺跡の整備状況

歴史研究室では、7月中旬に東大史料編纂所と合同で薬師寺の文書調査をおこない、7月下旬には石山寺の依頼による文書調査に参加しました。石山寺では、最近その所蔵が再確認された「薰聖教（においのしょうぎょう）」13巻に関する記者発表が26日におこなわれ、その準備に協力しました。また8月には、東大寺の聖教文書類の調査をおこない、文化庁の醍醐寺の聖教調査に参加しました。その他、興福寺文書や北浦定政「松の落ち葉」の調査や写真撮影なども継続して実施しています。

遺跡研究室では、全国各地で整備されている史跡・遺跡の中から、より大規模なものを120箇所程度選び、その整備・活用・管理の状況を調査研究する計画を持っています。初年度に当たる今年は、まず対象とする遺跡の選び出しと調査項目などの整理をおこない、現地調査は北海道と東北地方を計画しています。来年度以降、順次地域を広げていく予定です。また、古代庭園に関する調査研究も重要な課題です。今年度は、日本庭園の源流ともいえる古墳時代以前の「流れ」に関する遺跡や遺構を対象にした研究会の開催を計画しています。これらに併せて、発掘調査で確認された「庭園」遺跡のデータ・ベースを作成し、奈文研のHPで公開していく予定です。

(文化遺産研究部)

文化財関係研修の実施

発掘技術者研修「一般課程」

今年の「一般研修」は、例年よりも10日ほど開始を早め、6月12日から7月17日の日程で実施しました。考古学調査の経験が十分でない埋蔵文化財担当職員に対する研修であり、本州・四国・九州から総勢20名の研修生が参加しました。考古学の方法論、各時代考古学の概説、文化財及び文化財担当者の法的基盤等に関する基礎知識の習得のほか、最も基本的な考古学遺物の観察・実測の習得に力点を置いて、例年よりも多くの時間を割き、個人指導も採り入れました。

研修生の評判は概ねよかったです。とくに好評だったのは、遺物実測実習と臨地講義・飛鳥藤原地区の遺跡見学です。一方、今後の研修に生かすべきいろいろな要望もありましたが、中でも、彼らが